



新田義統功臣録拾

~18
205
10^{TE}



新田義統功臣録第二輯卷之五

奪得一指云兩籠話

拒禦孤僧鬧三軍話

且說竹沢監物と玉琴と逸見入道とを深く恨み、いふはして失つてやと想ひわれど、あつた不害さんあつた猛らふその罪を弘くせんむをおそれ謀をりて人あれど失ふあきくをうらむと。多方お思ひをらゆしなり。此時基氏公と玉琴の色お溺れど多ひ。鎌倉お飯らせり。多の光景もくつて移る。供奉の人とこれを秋心ひ斯ひとあつた外おほりく。若深倉と変あつたば臍を嚙も尚及ぶはじと。相深く右玩を説くらへ。遂お近とららぬ飯らせり。斯のどくなくば我多ひ空かへすと。此より瓜同心焦燥みり。

航 20 10

東 志

新田義統功臣録第二輯卷之五

新田義統功臣録第二輯卷之五

急ふ一計をりし。一日基氏公小見入。鷹狩のこゝを勧めりせし。素より好せまゝ事なれば。こよまに由喜び少て。こゝ奥の旗ひる。妨るらん。翌日母も催さる。そのしめを命とす。竹沢畏し。何う苦しむとめゆ。只余れす。あゝこゝへ入らんと。暴も準備さる。さふふとあれど。預く想ひ設けらる。こゝなれば。忽ち小整ひ得。翌日の朝。さうたより多くの備手沢備。城外の郊原。基氏公を俱ひ。已ます。それ小進。四方を引路。もゆる。物数多くあり。ける。は。かざりか。嬉し。み。尚待ら。じて真せ。さ。あ。處。小。監物暴。病發る。の。を披露。万の。を家宰。お。付。お。このれ。家小飯。了。折。ら。法供。お。さ。ひ。た。逸見入道。の。か。人。使。成。あり。小人。のみ。只今。俄。小。病。奔。り。ね。と。君。お。告。早。家。小。帰。了。ら。う。望。る。

不圖過失。あ。く。大。中。な。れ。傷。を。か。う。り。命。の。ほ。も。危。く。お。ぼ。へ。の。こ。ふ。は。れ。頼。ま。る。せ。な。さ。り。れ。ば。さ。く。ふ。入。り。せ。な。さ。ふ。か。う。ひ。と。え。預。ま。る。の。由。成。り。を。と。れ。逸。見。入。道。素。より。情。か。れ。性。な。れ。重。と。傷。を。負。ね。と。同。大。小。驚。た。使。と。も。小。り。う。て。取。ら。れ。ば。一個の家僕。い。で。ひ。く。一。恭。あ。う。れ。を。の。び。か。く。奥。さ。う。た。処。小。請。一。只。今。主。翁。監。物。お。や。づ。あ。べ。と。小。世。の。ら。ら。け。せ。ま。と。烟。茶。を。出。し。彼。家。僕。へ。退。去。ぬ。入。道。ハ。獨。黙。然。と。し。て。待。と。と。海。小。更。一。個。の。人。き。も。出。あ。ら。ざ。れ。ど。甚。怪。し。み。四。方。を。顧。れ。折。り。紙。門。外。脚。歩。お。た。く。一個の人。こ。を。入。り。あ。り。入。道。ハ。何。人。そ。く。着。る。小。堂。圖。へ。玉。琴。な。り。り。れ。あ。ぞ。大。き。に。嘍。的。慌。忙。此。処。を。立。去。さ。う。と。れ。ま。ふ。又。一。個。の。人。事。さ。り。り。れ。ハ。愕。然。と。し。く。首。を。お。ぼ。し。



會下守王各惠友常卷之五

三 衆日王相



經本屋津新行有卷之五

これを望む。則ち主の監物あり。生平の光景あり。不審あり。ひるぎ。これをのづれば。監物とら。たし。声あり。足下何人の詩をうけ。檀小此と。海小。玉琴と。蜜話とは。做ら。ぞ。答ひ。不逸見の。私得ぬ。と。想ひ。静小對。し。足下不圖傷。私負。ひ。され。より。小人。囑託。を。する。あり。と。使を。と。招き。ま。ひ。ある。老早。私。内の人。此案内。此處。あり。監物。顔色。を。か。何由。斯の。傷。私。宣。され。此。是。玉琴。が。困。り。足下。も。知。あ。女。兒。と。君。の。は。あ。な。れ。ば。我。思。も。等。困。な。海。此。国。の中。に。置。基。氏。公。な。り。他。の。男子。に。見。る。を。免。され。ば。と。使。を。は。り。て。足下。を。呼。ひ。う。た。ら。せ。

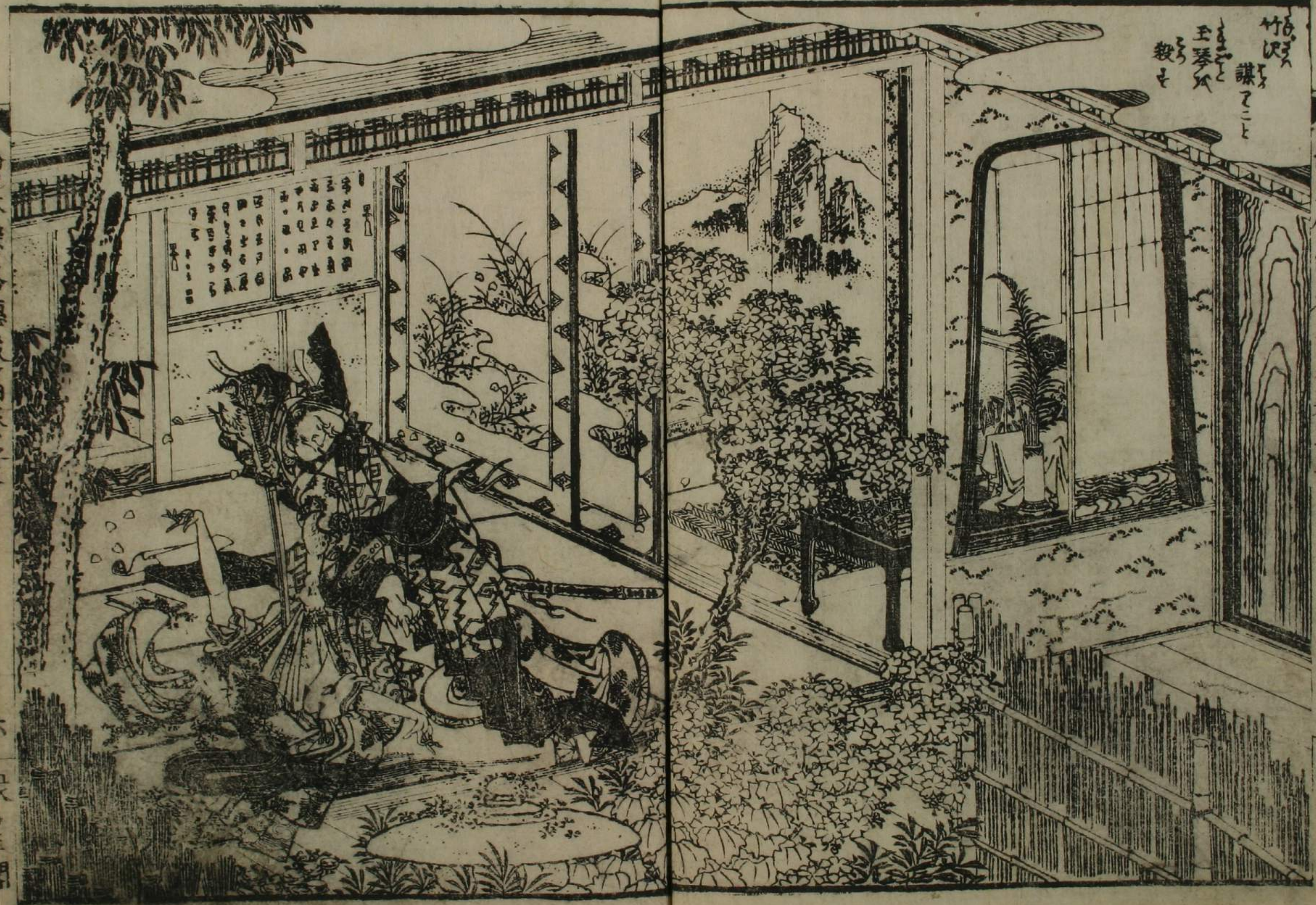
さ。酒。家。を。ぞ。れ。所。なり。想。ふ。足下。玉琴。に。懸。想。して。一時の。春。路。に。迷。ひ。ま。あ。や。や。や。は。な。れ。も。今日。は。君。の。怪。し。み。何。の。辭。を。て。弁。説。う。こと。を。得。へ。と。より。此。状。を。明。白。に。君。に。訴。へ。女。兒。を。守。衛。し。解。怠。が。私。あ。ら。ま。ら。んと。い。さ。され。し。り。ま。ん。が。逸。見。入。道。心。の。裡。に。彼。を。ら。み。て。斯。と。あ。と。精。也。此。陥。井。に。墮。落。す。は。奈。何。とも。没。理。會。素。竹。澤。を。斬。殺。し。自。害。せん。と。思。ひ。は。る。が。ほ。と。想。ふ。く。武。士。の。か。淺。猿。に。冤。罪。の。名。私。残。入。の。屍。の。か。の。取。な。れ。ば。い。ふ。し。と。私。免。れ。ん。と。あ。と。は。い。た。れ。と。忽。ち。不。志。を。持。て。一。言。葉。を。畢。し。夾。七。夾。八。の。央。言。れ。ば。監。物。中。公。の。り。され。ま。あ。と。足下。か。ぞ。り。宣。う。を。む。げ。なく。君。に。告。げ。ん。の。明。友。

合目八集

日一

の好まふあはじ。あまわれ後未玉琴をおりひ断つらふ。折言言なく
 ては饒一がどし。幸ひらふ熊野の牛玉われへこれふ誓ひの言を
 冥く血を灌多るといつふ。逸見入道とらふ。肯へだれども勢ひ
 の中らぶさふあはねば。その乞ふはうせ。既小血を灌んと。腰刀を抜り。
 左の手に毎名指を押當ると。監物四方を顧と。やじり多かり
 人れ知らんも公苦しと。その手次とらふ強くおし。さるもどふ。指を
 忽ちうつとされ。鮮血液くと滴。紙の面とらぶ。未小漆まり。
 此時監物を切落と。れ指と牛玉とを仮め。逸見ふ對ひ斯誓ひ
 多あうへ我何を疑ひとらん。あまか。と人のすね間ふと。此を
 退り多るといつれ。小逸見へ虎穴を逃と。る相ひをばし。いそ其
 席を逃と。く出ふり。監物へ逸見が遠く去るを待。急小玉琴
 をとらん。いとはとあう。罵て云。よ是婦我大恩忘れ。され。
 身のと栄花をうらんと。洒家を顧と。うれぞ悪され。か。れ膿包的
 瓜生おく。後い。うら。禍を假と。も知らん。か。れ。情あ。く。も。腰刀
 を抜。く。心下を穿。ひ。呼。く。と。叫。び。こ。り。ぐ。り。れ。を。は。げ。け。こ。ま。み。刀
 四刀刺貫け。る。渾身血を流。と。遠。小。空。あ。う。なり。あ。ま。り。監物。を。う
 ら。わ。ほ。ひ。く。逸見入道。指。を。玉琴。が。口。の。裡。お。り。れ。さ。あ。ね。さ。は。あ。て
 此圍を退去られ。れ。知。らん。う。ら。ふ。か。う。り。し。怪。し。う。り。ら。く。こ。と。う。り。鳴。呼
 遠玉琴の。ま。斯。浅。猿。さ。死。を。遂。と。も。り。び。が。う。嚮。お。許。守。の。夫。瓜。嫌
 私夫を設け。し。う。り。母。を。非。余。子。殺。し。父。を。苦。し。は。後。私。夫。の。
 家。采。く。亡。び。さ。れ。も。敢。く。衰。し。て。又。原。の。夫。を。と。ら。ひ。終。ふ。父。の。誓。
 と。と。れ。基。氏。の。妻。と。ら。る。小。至。り。渾。く。巴。が。弟。の。こ。を。利。せ。んと。す。れ

の好まふあはじ。あまわれ後未玉琴をおりひ断つらふ。折言言なく
 ては饒一がどし。幸ひらふ熊野の牛玉われへこれふ誓ひの言を
 冥く血を灌多るといつふ。逸見入道とらふ。肯へだれども勢ひ
 の中らぶさふあはねば。その乞ふはうせ。既小血を灌んと。腰刀を抜り。
 左の手に毎名指を押當ると。監物四方を顧と。やじり多かり
 人れ知らんも公苦しと。その手次とらふ強くおし。さるもどふ。指を
 忽ちうつとされ。鮮血液くと滴。紙の面とらぶ。未小漆まり。
 此時監物を切落と。れ指と牛玉とを仮め。逸見ふ對ひ斯誓ひ
 多あうへ我何を疑ひとらん。あまか。と人のすね間ふと。此を
 退り多るといつれ。小逸見へ虎穴を逃と。る相ひをばし。いそ其
 席を逃と。く出ふり。監物へ逸見が遠く去るを待。急小玉琴
 をとらん。いとはとあう。罵て云。よ是婦我大恩忘れ。され。
 身のと栄花をうらんと。洒家を顧と。うれぞ悪され。か。れ膿包的
 瓜生おく。後い。うら。禍を假と。も知らん。か。れ。情あ。く。も。腰刀
 を抜。く。心下を穿。ひ。呼。く。と。叫。び。こ。り。ぐ。り。れ。を。は。げ。け。こ。ま。み。刀
 四刀刺貫け。る。渾身血を流。と。遠。小。空。あ。う。なり。あ。ま。り。監物。を。う
 ら。わ。ほ。ひ。く。逸見入道。指。を。玉琴。が。口。の。裡。お。り。れ。さ。あ。ね。さ。は。あ。て
 此圍を退去られ。れ。知。らん。う。ら。ふ。か。う。り。し。怪。し。う。り。ら。く。こ。と。う。り。鳴。呼
 遠玉琴の。ま。斯。浅。猿。さ。死。を。遂。と。も。り。び。が。う。嚮。お。許。守。の。夫。瓜。嫌
 私夫を設け。し。う。り。母。を。非。余。子。殺。し。父。を。苦。し。は。後。私。夫。の。
 家。采。く。亡。び。さ。れ。も。敢。く。衰。し。て。又。原。の。夫。を。と。ら。ひ。終。ふ。父。の。誓。
 と。と。れ。基。氏。の。妻。と。ら。る。小。至。り。渾。く。巴。が。弟。の。こ。を。利。せ。んと。す。れ



竹
沢
謀
王
琴
殺

命日本... 各... 惠... 後... 自... 用... 天... 之... 一... 五

繪本... 卷之六

五... 卷之六

嬪悪の行状皇天何ぞ鏡かがみし多し人ひとやかりふ竹沢たけざわが身をかりて罪つとし
 めふあどあしふ人ひと且説まこと基氏公もとかかれこそこのあどこの露つゆありま
 て終日ひつしゆ狩かりけししと返かへりまじり心こころ近ちか臣しん告つぐ云い今日何者けふなにものもあれ
 ぞ。王琴娘わがねむすめを害がいしゆとて監物けんぶつをとりめ奉家ほうか嘆なげをせしひねとせ
 えしせん基氏公もと愕然おどろ然ぜんとしとちとせむひ急いそぎとの郵ゆうふ往むかへ着き
 めめふ監物けんぶつ王琴わがねが屍しかばねの側そばふ居いる。口くち願ねがひたれが基氏公もとの身み
 らせまふを着きる。泣なくしりりたれ小臣こしんな放鷹はうたうの所ところ仕つかめはのりしふ
 俄あやうふ満みち内うち跳はし心こころ驚おどろけ神氣しんき悪わるふなりしふより。君きみふ告つぐ家いへふ歸かへり
 ひひーが女兒むすめががのどとく浅あ狭せした光景あかりを着きる。氣きもくれぬ消け
 る。不ふぞんの嘆なげとふ耐たを過すしとぶりかど斯かくもくづたあふれは
 穿うした屍しかばね狐きつねあふたしふふ口の裡うちふ一ひと根ねの指ゆびれあふよりてよしく

かんぐみゆふ。この嬪ひん男をとこありて。女兒むすめは無な是これ非ひの戀こ暮るしわつと告つひ
 ざれがゆあかくははひひーなりん。斬き害がいととせられ。悔い氣きのあより
 小こ其人そのひとの指ゆびを啖く断つしとわろく。想おもわれぬ。小臣こしんが家僕けやくをば
 残のこりなく召集しゆしふめて穿鑿せんさくふ一人ひとりとしと指ゆびを傷いた失なれとなし。
 君きみりー王琴わがねが爲ためふ雙ふた言ごを報むかへんとおほとく。伊い家人かじんを以もてせ
 めんとすへすふ。基氏公もと玉琴たまがねが死し狐きつねあく惜おく嘆なげととたす人ひとぞ
 監物けんぶつが勸すすめよほらせやめて雙ふた言ごを殺ころして。亡な魂たまを慰なぐさめん。俄あやう
 家人かじんを召よすふ。一ひと盞さん茶ちや時ときお仕つか候うし。王琴わがねが横よこ死し
 宣のたまひ。人ひとの指ゆびを貞まこと檢けんまんとしとむさうふ。凌うるな。
 見入道みいりだうとていつるころのありとて。只ただ今の召よす應おせざりし。基氏公もと
 甚い不ふ審しん多たひ。熟じやくく思おも惟ひし。あつふ。今日けふ狩場かりばより印いんより。

新本壁流集後編卷之五

新本壁流集

かくることの怪しきよ。又使せしる厳み召するハ。逸見も今の辞ふ
 術なり。使と傳ふ基氏公の伊前。糸のりしれを。尤存ふ命せし
 其指をあらせしめ。あつ只今切らる。おぼく。尤のや。名指傷失せ
 け。縁故を問ふハ。さこそ。不明白。ひひ。なご。躊躇。て。答
 せざれば。基氏公。大に怒り。せまひ。汝が指。と。王琴。が。これ。裡。あ
 わ。い。と。や。と。い。と。す。れ。あ。く。宣。へ。逸。見。ハ。さ。に。お。り。ひ。ま。か。ら。い。れ
 ども。王琴。と。さ。つ。る。名。を。聞。え。人。の。我。を。冤。罪。に。陥。入。せ。れ。よ。と。猜
 されど。斯謀。らる。人。ハ。譬。蕪。子。張。子。が。口。辨。あり。とも。好。か。疏。と
 と。得。る。と。れ。此。人。縛。首。せ。ら。れ。ん。ハ。死。の。と。の。恥。辱。なり。と。猛。腰。刀。を。抜。て
 己。が。腹。に。突。穿。一。文。字。不。挽。廻。し。く。小。臣。王。琴。と。は。く。小。嬖。戯。れ
 こと。なり。と。し。と。奸。人。の。謀。に。陥。り。君。の。疑。ひ。と。蒙。り。し。れ。ハ。譬。言。ハ。か。疏
 こと。得。る。とも。君。の。不。明。を。頭。と。な。れ。ハ。是。忠。臣。に。あ。ら。ざ。り。と。あ。る。只
 今。自。害。して。その。罪。に。伏。し。ぬ。嗚。呼。是。君。の。千。金。の。重。に。此。才。あ。は
 せ。ば。萬。の。る。戒。に。あ。ら。せ。た。中。に。さ。に。く。色。欲。り。其。く。め。と。做
 人。這。回。の。事。と。い。や。め。く。さ。か。ち。か。る。こと。あ。ら。ず。正。し。く。王。琴。が。色。を
 愛。し。あ。ら。よ。り。一。時。の。不。明。な。れ。不。及。び。ま。す。此。言。り。亡。れ。と
 せ。ま。の。と。ら。小。臣。黃。泉。下。に。あ。り。て。い。う。む。り。か。ら。喜。ば。ら。う。ゆ。と。云。声
 ぞ。ふ。苦。し。げ。あ。ら。せ。し。終。ま。ら。う。な。り。亡。び。り。嗚。呼。這。忠。臣。か。く。非。命。の
 死。を。遂。る。こと。過。世。任。り。れ。罪。を。う。か。り。置。入。憐。し。む。ふ。あ。ら。ざ。り。や
 基。氏。公。ハ。只。今。逸。見。が。忠。言。を。述。く。死。せ。れ。を。面。前。に。着。多。く。も。さ。と。て
 む。り。て。只。願。王。琴。が。の。こ。想。ひ。つ。け。心。快。く。し。く。樂。こ。ま。ら。せ。と。これ。も
 心。地。煩。き。着。け。れ。ハ。供。奉。の。人。に。さ。ま。敬。馬。に。斯。く。在。ま。ら。ん。ハ。然。

かたふあじと君を助けすいとせ此地方を旅登り鎌倉へこと供せり
り。渾此一件の林沢已とが望のなりとを怒り。如此奸計を用ひ二人
の命を断としども何の功をもあらずと。あつてふ年頃の志を空きり
のくひり。原此監物へ新田氏を叛き足利氏を復事。義興公に欺
弒せしより尚幾許の人を殺害しりしも。今日お及ぶまじ其報のあ
はれ。如此奸悪の徒自王天如何を免れまじと。畢竟甚の報りあり
下回ふ分解を聴不題問話且説義統公も此年耳下総に在はして
只顧仁政を施し賢を尊ひ士をりりしり。後不奮臣井の求馬を
首め奮好の門のさなり。由緒なれりのも。彼に慕ひあつて臣と
んことを需るりの少くも。今漸く勢ひ強大なり。武備すも
整正ひめれば先公の雙言といひ近き敵なれば上総の林沢を討せし

議あり。望められぬら其命小休し既分頭を定め
あつて先隊と船田太郎左隊の水瀬九郎右隊と五十熊中軍
は義統公後陣の水瀬八郎なり。由良兵司井の求馬の二人の軍
とり。其危うらん方救ふと軍令を嚴し各二百騎を將
。其勢都合一千餘騎武威皇に扮打り上総をばしりて起り
此のさても竹沢が方おぼへられ監物大に暴れ暴れ國中に勢
は集りに生平邪なること多かりし。其催促あつてその俣に
五百騎あつてり。かゝる敵に急使に急倉を急
を告りし。此時基氏公不例に漆まき自ら馬をさしなす
近國の味方お中沢を救ふとの音を命多ひられども。こゝ自國の
守めれり。勢を分り上総に遣はれ。さふあつて竹沢が勢は

曾入... 一...

子餘騎ふなりわれが少くこれふ力を得自ら其勢を將く国境ある
 栗山川の邊に陣營を張ちられ処に一日陣外甚鬧しく一個の小卒馳
 来りて云只今何方者ともあらずと大なる先法師の御陣の前ふあつて
 相公不見糸とぞたより云ひて突入をべくあはるほどに陣門を衛する
 們これをさへいを携てれ禪杖打振る支ゆるのを擲倒し狼藉
 法ふことづれば綁捉んとせれども其勇敵しむる既し御前ふはゆれ
 ざるひとさる言の終らざれば大の法師の怒り叫び禪杖を水車の
 ごとく還しほろけ面前に近寄んとせられむを竹沢急ふ左右ぞと
 られを射防んとせられむ彼僧大音ふ呼ぶ云相公みづりののみ做し
 多ひと貧道やづれたとありてとさるはゆきあはれり監物これやゆ
 めがみ笑ひされとてあんなりのなむとて多くの人ふ傷をうつけさる
 こと信しからぬと再射んとすれと僧忽ち禪杖を投して貧道
 相公お見へんとせられ人を根ふ遮り注しふよりやむことなき斯の如
 とあはるなりさらふ害心のゆるぬりのを相公よ落し察しきとんと
 他念つた光景なれば竹澤心あり士卒を制し僧をひり座成あて
 ちめて云和尚何の説とぞとありてとあはるなり僧礼をほして
 貧道へ原相摸入道高時のらら二階堂虎丸と叫做的なるが
 高時の新田義貞が爲ふ亡びわれ其讐言報ゆぐ多幸に神な苦
 ちやりの我負も越前よむかき戦没し其子義貞も相公の
 ちく矢口お亡びわれ使疫鬼復讐言想ひを做し積年の志は空
 ちうとぞたふあはるゆがせめく其子孫なりとも討く亡君あは向
 んと東國を捜索しふ近年新田氏統とすれありその故義貞

の子なるはし然るはほづもなれた新田の正統なればとれを討て
讐なりと。その讐を窺ふも下多くれ豪傑あれを容易討
ひかす。危やせん角やせすと想ふよりか。相公役を制し多く
しと。これや天翁貧道を助けもあればと。さてこそみけ
で耳く。相公の虎威をり。宿志を遂へんと欲と願ふ幾分れ
恵をくれ。貧道を伊陳小置しあまんと。おひらめくはさま
甚信しやふけつれや。こも狐疑うた。竹沢監物これ打
つ。さうく怪むそのもあはせ。陣中おとめを。正統は身
を亡くすと時しを至りり。か。監物多方みして此
八般の武藝采女貫通よ。のこる。知界衆お秀古今無敵豪
傑なり。これ。こよなく喜ひ。篤く。執待軍議を。と。と。り。り。

討讐敵奈先公神話

辞富貴為不老仙話

且説義統公を上総と下総との境に栗山川に隔て對陣し
ぬひ。さうり軍をせしめて暫くその動靜を窺ひておとす
こ。小松田太郎。此回の先陣を蒙り。川岸を添へて陳營に其
性急速した勇敢士なれば。面前に敵を着せ。空しく日を送れ
こ。い。か。か。想ひ。や軍令を背くも。一夜討て敵竹沢を
生擒し。それをり。罪を償ひんと。一夜風雨く。下
兵二百騎。将。蜜う栗山川をうち渡り。竹澤が本陣を襲ひ
り。お風雨の烈。これ。上下心より。懈り居る處なれば。大に狼狽
野の沸が。騒。騒。東西に散走奔。る。敗北をへ



繪本堂五流續任前卷之五

石虎單騎
竹沢陣
關

會不...

十一
泉屋

着へばお知よ一個の法師は一本の禪杖を打振る勢ひつゝ船田
 隊小討く入圍く走轉せしむ。さうさう小猛を船田が勢只一人の爲
 小暫く足取留めしむ。なほらうらら竹沢が敗兵漸く小隊をうけ
 船田が二百余騎と稲麻竹園逃さばどぞ攻入りけし。今をあらう
 船田が勢七零八落既小危くつゝあつり。太郎此光景を著く。大さふ
 集燦怒甲斐なりのもれあすいふ。なほ十分小勝はせられ軍は
 あの老法師一人小斯不覚とすることを易かき経とも軍令と背
 此敗をとりたれば何の顔せあり。君のつゝ急おつた。よりく彼
 法師ときまかひて我首と彼小授くる。我彼が首とひらみ。二の中
 小あどどと重さ百斤小迫と眉尖刀を打振僧を的く斬て蒐
 らんと。折く。忽然と。成妻の方小。因声やあるむ。とこそあれ

竹澤が備拵とせし。背後より乱れ。只着せむ。二個の大將
 各々小長刀鎧と携へ。困り勢とせん。小撃散。一条の血路
 とひら。船田を援ひ出せり。のあり。是誰と知り。則由良兵司井北
 求馬の二人なり。今此小事り助く。経て。宵は船田太郎栗山川
 渉りしを。義統公ゆきせし。ひ。この夜討をかくる。ゆをあらう。彼を
 疎失あらん。も。初。兵司と求馬と。一。蜜。小其跡
 何と。彼の功と。做さ。かの。あ。や。て。ま。若。歌。の。爲。母。昔
 し。ら。れ。だ。助。く。べ。の。命。小。り。斯。々。救。ひ。出。せ。し。や。り。此。より。か。

義統公の三人の影響をたれと詔り。お。づ。ら。五。十。熊。坂。さ。

か。栗。山。川。を。渉。り。し。は。恰。好。之。人。小。行。遭。た。ま。ひ。し。れ。ば。その。志。

あ。れ。を。喜。び。し。し。船。田。と。軍。令。背。ひ。く。不。覚。と。り。し。は。

光景なり。石虎も是等の敵を追ふにぞけ。監物とむかひ。義統
 公の御陣もさうでよるを。兵司違ふふこれを望まらふ。其容貌も華
 げれども。はげしくもなれ。縁塚もれ。且曉的且喜び。慌忙出いて
 名告られ。石虎もよほさび互に懐舊の情とのどく。さうも涙を催
 さらり。中あり。石虎法師の義貞公におかれ。せ。我助も
 はへ。幾程なう。さ。後の大籠丸馬。めを扶け。さ。伊豫國
 敵の爲も亡れ。さ。今。や世の中。想ひ。伊豫國
 今張の浦より。松も衆。隠岐國に渡り。終ふ。さ。京路のむ。
 拵松を。さ。此有。松。志を激。東國に於て
 小衙内。搜索。これ。新田家。再び。世。あ。あ。
 さ。下。此合戦。あ。竹澤。捉。せん。彼を
 欺。此。人。首。尾。詳。兵司
 熟。その功。賞。後。義統公。立
 今日。有。枝。有。葉。細。説。石虎。の。百。折。千。磨。嘆
 美。喜び。兵司。石虎。誘。義統公。の。人。
 い。縁。故。を。詳。告。君。よ。な。れ。喜。び。復。事。者。們。不
 ひ。あ。君。臣。相。訪。か。り。し。且。説。義。統。公。を。雙。敵。竹
 澤。を。な。さ。擲。し。全。く。の。勝。を。得。ま。ひ。れ。上。総。一。國。の。民。を。見。ん
 累。年。竹。澤。が。非。道。不。貸。り。時。へ。れ。賤。室。を。分。ら。救。民。を。救。ひ
 多。り。れ。下。民。其。德。を。感。佩。し。か。あ。り。ね。那。の。と。て。義。統
 公。を。下。総。へ。飯。ら。せ。ま。は。惠。仲。莊。輔。等。の。預。勝。軍。の。と。を。伊。豫。公
 みた。賀。賀。の。さ。は。し。遠。く。出。く。近。く。も。り。大。や。酒。を。分。

催りし人の功勞を懐ひね此折かゝ惠仲莊補ホ石虎法師ホ昔名
 對面。上下さめれたるうらゝ悦ぶ。斯く后義統公日派し新小
 壇を築きた。先公義貞公の神主を安置しその前子竹澤監物及
 ひとと人自らその首を斬りこれを供へ香花を供して神靈及祭
 多ひらふ怪しひ哉天俄ふめと曇り霹靂轉々と鳴り黒
 雲此処あすひ下るる着て。霎時小雲暗白日赫々と明ふはれ
 了れば人々奇異の想ひを倣してその処を着るふ竹澤が首微塵
 不碎くありぬ。この儼の首を伎へおより。神靈を無と。怒りと散
 しまふとんと。君臣懐舊の涙と浮ゆ。尚足利家以斃とぶに謀及
 ぞころり。再説鎌倉の官領左馬頭基氏公。今春上総より不倒
 やしく飯りまひられ。漸く小重らせむる處小竹澤監物義統公

の為不戦ひ負く。擒とかり。上総の新田の有となりぬとす。成
 大に驚れ奈何とぶれと患ひ悩む。是より病甚とあり。成
 遂不逃去せむ。多ひら。正。是。南朝の正平九年四月廿六日
 なり。此のころ中より下総へ下る。石虎法師義統公を勸り。此敵
 不棄して鎌倉を襲んと討けれ。此をうから東國瘟疫はめん。あ
 えやう。人民を傷て。扱ふこと限り。あけり。軍兵出さる。も叶ひ
 か。さ。これを救り。義統公人々と議す。はひ。石虎法師
 の。貧道。既。七十。及。昔。今。至。の
 老景をかんがみ。斯の。病の。世。行。多。回。是
 尋。非。命。よ。せ。る。人。の。怨。靈。崇。る。処。と。お。ほ。一。寺。と。建。立。し
 其。冥。福。を。祈。り。多。す。瘟。疫。傾。お。お。し。と。勤。め。や。る。義。統。公。

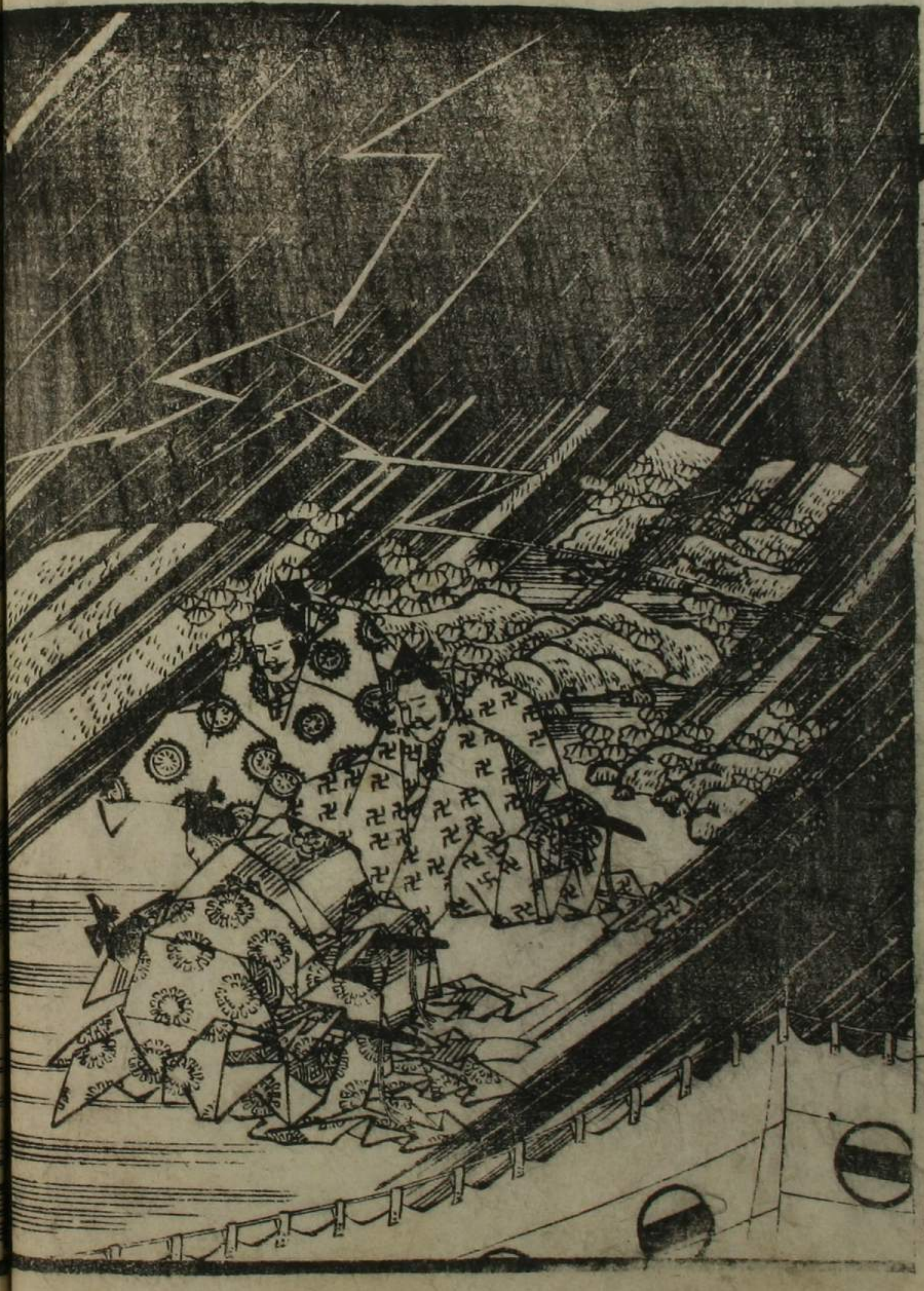


義統公
 竹内
 朝臣
 義成
 公

壘
 祭

會本葉名各惠後宮卷之五

十二 櫻屋



新石屋立和行年卷之五

十一 兼屋

けりぬ人こそその理お復し速く寺を建つべしとて其所と議りけり。惠仲とてみよ云人も知りまふこと。我祭とて聖孤廟の邊の靈驗あり。君の守りとなりわれと多かれ其廟の邊に寺を建彼神をりて鎮守としむいふ。なぐく栄ゆくさうゆと速まればこまひふもと。其地方に寺とてなぐればありふけり。此事素より僧の関る處あればとて石虎法師をしてなぐぐのことを司とせしめぬ。奥に小井の求馬と。御田川より。拵松と誘ひよる家おまひ置けり。石虎法師お對面せしとたかひくはなぐぐびよる名お似しれをり。拵松くくと同しとおひわれと公私のことに般おれがゆを云せぬ。なぐぐはなぐぐ過りなぐぐ比ハ八月の未彼岸の時に至りり世間の習俗として佛お供養し。寺院お湯おぼるくことなぐぐれ求馬夫婦ハ父母にたてある人小原お仁を信し慈悲のこゝろあり。これ拵松を俱し四方の寺院お詣りなぐぐ。此に石虎法師お発願あり。新とて造営といふ。寺の前を遇れば。折ありと裡に入。其光景お着る。魏きたる佛閣いと莊麗に建連び。や近日お供養あり。なぐぐなぐぐなぐぐ。尚その精工のほどと見え。廻廊を巡る處に。あも石虎法師お行遣われ。なぐぐをなし成功の勞を賞され。石虎も礼をかくし。側の仮屋に請入。歌む。此時求馬ハ。なぐぐ機會ありとあり。拵松が。取て石虎お示し。いふ親教師。此童子。なぐぐあり。やと云へり。けり石虎怪し。と腫れ。なぐぐ一着。愕然とし。その拵松。あ。やと云へり。言葉のまより。拵松つとせより。法衣の袖。

巴く結く。あるかのかの親教師やといひささく。跡へ涙小いふことさ
 あやまらうら嘆けが石虎これを不審その脊梁を摩沙手や童子
 よこへ何としそ来はるも母何方おあるぞと問へいよ涙母姻こ
 應答をへせぐ。声うたてて哭たれへ石虎いよ怪しと求馬夫婦小
 問へ夫婦も声をうたせくさりルも小人夫婦京洛より此國
 はうり多れ折ら武藏の墨水の邊お宿りし小此童子親子も同ト
 家お宿りぬ。あうふ其宿の主へ賊婦やう。それが爲小童子が母の
 害なつれいほじふ小人拵松を助けこそ其讐を報へいぬ。さう
 誘ひもささひ置るぬと一五十を詳小云せゆれへ石虎驚れ
 尼が横死拵松が持命をむりひあつせ。そあは涙さうごさけ。ささく
 小すししい慰め且求馬夫婦小對ひ童子親子が才のほくと説話
 火婦これをうちさうて。その親子の縁の薄きところあり。中有
 石虎のさうりらん。かく持命の童子あれば今日より僧とたし。

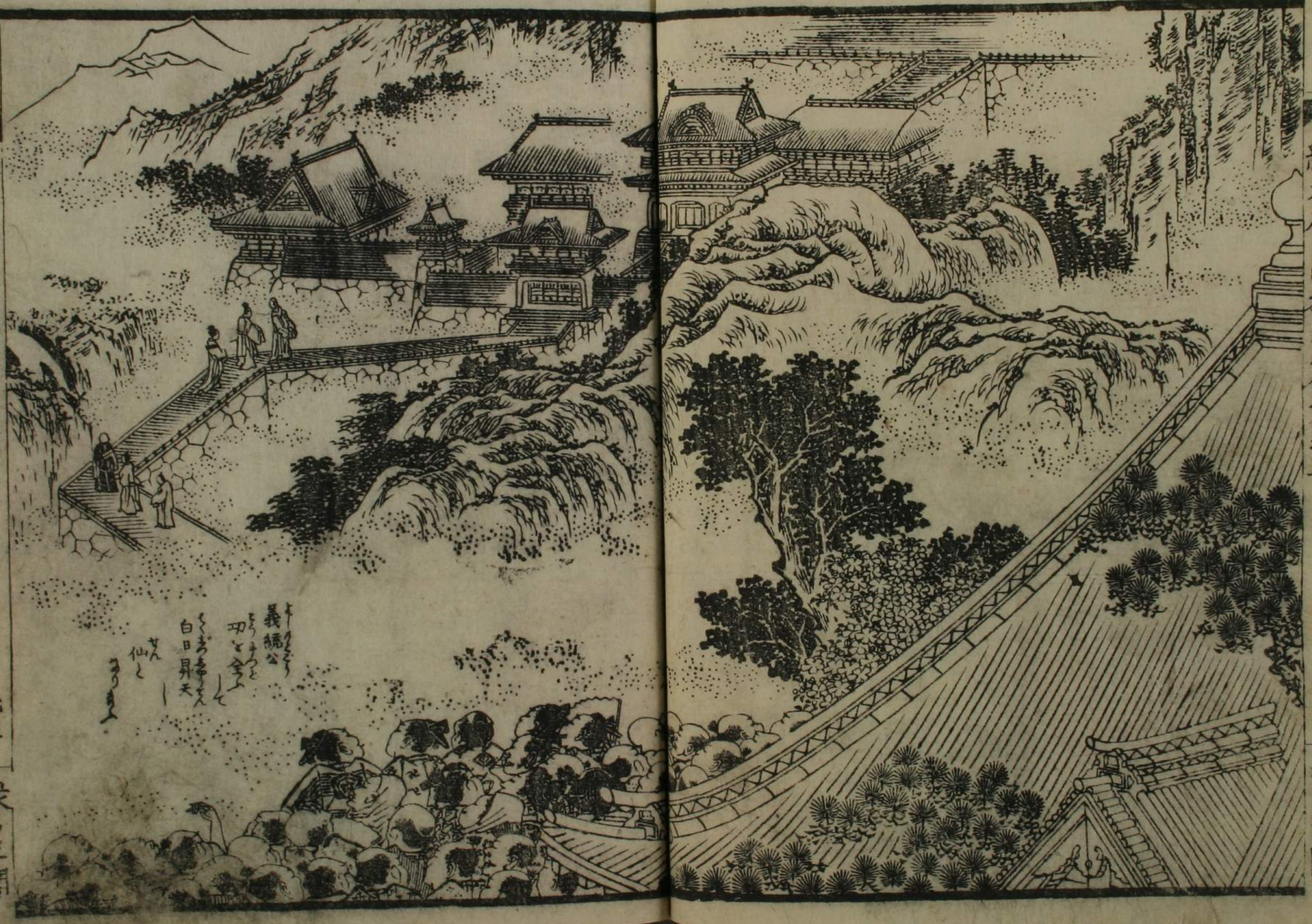
往く此寺の住侶ももるさうやとあるふ。求馬夫婦もそのようれ死
 して。遂お拵松を僧といひぬ。さても此寺の造管漸中なり得
 ぐれ義統公の命とし。石虎法師を導師となし。供養做さるる小
 たりぬ。是寺素民の病苦を救へ爲お造立されへとて。驅疫山救病寺こ
 號し。本尊は則瑠璃光佛なり。ほどなく供養の日あもあられへ義統公
 ちや兵司惠仲が們彼寺小詣あぐけ。此付書のり近國かきさるり
 一く。民其仁愛の程を感佩し。道俗男女この供養小會んと群集めれ
 ば。錐ぬらるるたの地もなうりけれ既小只今供養をどほらうまれ折ら
 群集のうちより一個の光公羽鬚髪委しく白た。身小道服を穿ひたり小

水晶の數珠をばまじり。右よ杖の杖を推しへ飄々として出来く。堂下のびん
ととも。楯頭士これを着て急ふささく(さぶ)れども。耳とくさるる。こころ進
を義統公怪しこころこれを望眷めふ。このいふ先年湯香保の山中
しく見えまひられ。紫花真人ありければ。慌忙しく杖敷をひりき。士
卒を制し。生い人の前へ跪板地礼をの。前年の教れやを謝しめい
ぬれば。生い人満面生春色云々。足下の心む正ち直くしてよく人の
諫を聴ゆれば。福多し。這回も石虎が勸めを用ひ民の病苦を救んと
よくも。此寺を建立し。酒家も此供養に遭ふべく。そむくと
事りぬとあるふ。敬んが甚くしめい。左右を顧み。生い人なるを告め
渾一般小拜伏くらやまひりて。それ石虎法師進み。茶一禮
の。云不図も生い人の喜らせむこと。今日の福何みりこれ小過と

る。貧道不肖の才をり。供養の導師となりわれど。才なく徳
と。その任あたへ。仰願く真人貧道に代りて。導師となりて
たやひなんあ。此寺の繁栄疑ふたあ。と。義統公ふこと
らぐせられ。その心も其心を猜了。俱に乞ふひり。真人を。わのむ
辞し。二人只顧ふ乞ふこと。なりやあり。遂に導師となりて
其法會流行ひね。此時彩雲碧空に。花降音楽を。われ
と。義統公を。象詣の貴賤との奇瑞を着。信心心魂徹感喜
の涙が浮めけり。程なく法會終われ。石虎法師真人を誘う。方丈
請い。ま。小歎待ね。折か。義統公兵司惠仲を従へ。方丈
多。真人を見へ。今日の礼をの。后宣ひ。われ。真人の教
あ。今日の宜き。至。願く。尚此うの。人

の云ら。足下讐人竹澤と云心のすし討めらる人小鎌倉の基氏の
 近日亡びぬ且昨日京路の將軍我詮も死せり。道遠さかゆゑ
 今こそおぼえざれども我神通をもて知り。近きよの必と其つげ
 あらん今斯一時仇讐の亡び失はれよ。誰を討んとしあや
 これをもあうごその根幹を断んとせ。天下の人民を殺しそご
 中まじ。罪なれば民を害のふ。暴虐これより大已しなはし皇天何ぞ
 免しあふご。足下功此お止ら命なり。夫人世のさうなれば輕塵の
 弱草は擣らごとし。ぶらなれば齧らり。果しなれば望を遂んと辛苦
 今の月日をを。何の樂しなごころあらん。功成名遂と身退く
 も天の道としければ今より我は從ひ雲小御風おまの道を歩ひ
 長きうかれ仙境の樂しを極めら我實と此事を告んが鳥お此も

事なりと説けとバ義統公をもち。石虎兵司惠仲。們其教お伏
 一。人世のさうなれば感悟しなご。これより四個の曹真人およつて
 仙とあれの道に学びり。一日仙人おらぐおひうひ各位へとや道
 学やしく熟し得んとと。尚おとたんとと勉めら我今こそを去る。
 明年の春再び来り誘うんとと。何方もなく去りぬ。斯て其年
 もられ正平九四年の春おなりおなり。近日人の風声おれをゆら。去
 年の冬義詮公病おかりて失多りとありし。四個の人ぐと。
 仙人の言葉空しかりぬを信し尊ふとと。近日うらおのあふと
 りうて来ると。その期をを俟てびぬ。さ小義統公を熟くおまひ
 らく小人間お居んもとや俣おあれは。是まぐ我お復事ありし
 人こそ名残を惜さんと。一日天氣和暖ありて。万山霞濃中なりお。



繪本御成敗式目卷之五

七二 衆星閣

義統公
切金
白日昇天
仙人

繪本御成敗式目卷之五

衆星閣

咲きわたる花のはのくこゆるさば其愛べうしむる小暴お人くを
會集して佳酒美肴を儲け春の長閑なれを賞せよとさす
小款待多し酒園なれ不及び人々對ひく宜ひく足下等
累年我為小百折千磨成做ほつより今日の樂しむを得る
是すくハ仇敵足利家成亡し各位をして封候の富を受あんと
あつふ何を料らん足利兄弟相襲く亡びければ討つたの讐さし
如斯なれば何の望ありく世不横行し罪多し人民を残害する不
忍びん我々が功此止るハ是渾天命なりよろて我衛小紫花
人と契り置くこのあれなればこれより幽陰の地は世に避けて道
学んく天年を終んと想つり人々我將へ持てる金帛成らんと
觀樂を極めく生涯を送り多く小國守となり武の高し

心神を勞さんより心のやみく世に狂ふこそるか小増らめ命
とせよ。こゝその理お伏しわれど義統公小別はすのそを我小
ぞいかなれ所へも從ひ糸りゆんと乞へれど。ゆじあつね成争ひ需
処小遙うなれ遠山の方小白雲起るよとる。海くは庭樹
の松れ梢よかりし。忽然としく雲中より紫花真人現れ出て
云らく。人々他念る夢あふ息らざれば。幼言のごとく誘らんがため
只今此小ありけれと。藥丸一顆をよめれば義統公致んぞ拜受し
服し多への負兒その側小ありつれ。預く此事成聞知れハ進み出
奴家も君小從ひすのせ。仙宮の裏小長は妹濟を結びてらん
其餘とくを嘗む。真人又一顆の薬丸を石虎兵司惠仲の三人小
服さしめり。小不思議や義統公致ん。め茶を服せし人々一般小

習くと花を天空小昇と云。残る曹これを惜しむ。その裳と云ふ
 へんと云ふれ不及とて。遂小白雲小す。それ形も云ふなりぬる。あま
 皆呆然として。只是掌の裡の壁。次棄これと云ふこと。嬰兒の母
 を失ふる小むと云。泣流して嘆息暮へと。さう小没理會り。斯
 くも果つたふあふ移へ。人々相商議ける中。君は別は何る世小
 望のあふと。今此地地方あふ人もよ。なほ塵埃世小交らる。り
 深山幽谷。小躰と情を檀す。りて。天年以終る小志く。さうと云。
 ちうさうれとれた。船田太郎。れ舊巢榛名山。こそよか。めと義統公。れ余
 置ぬひと。れ小はる。せ。時へありし金銭米帛を。榛名山小納めつ。人々
 彼所小赴んと。と。粵小莊輔を累年。雙言と。ありひ。足利兄。弟。病小
 かりて。亡むひ。ぬれ。張と。弓の的を失へ。う。ご。さ。う。た。ぬ。め。折

か。さうとも。頼と。あり。れ。義統公と。仙と。なり。さ。う。ふ。甚。趣。て。
 熟く。こ。越。く。の。こと。を。あり。ひ。け。う。れ。父と。忠。不。死。一。妻。ハ。愛。す。
 害せられ。女兒と。嬌欲。亡び。我身へ。望。とな。う。と。是。渾。天命。かれ。
 こ。を。さ。う。り。非。命。不。死。失。れ。と。の。冥。福。の。爲。さ。は。を。か。く。男。ふ
 墨。染。の。衣。を。穿。ひ。拵。松。と。俱。不。救。病。寺。小。と。は。ゆ。ん。と。人。と。小。此
 小。云。け。ぬ。れ。と。ま。その。心。の。す。あ。く。志。多。人。と。幾。許。れ。金。言。ハ
 分。ら。ふ。へ。仏。を。祭。の。料。と。かり。莊。輔。と。拵。松。と。を。寺。に。残。し。水。瀨。兄
 弟。夫婦。船。田。太。郎。五。十。熊。母。子。夫。婦。求。馬。夫。婦。兵。司。が。渾。家。と。云
 く。十。一。人。榛。名。山。に。入。り。入。り。世。の。人。と。交。ら。ら。ぬ。と。生。平。小。睦。ひ。相。集
 會。く。觀。樂。以。極。め。生。涯。以。了。う。過。し。ち。れ。と。な。ん。今。も。彼。們。の
 子。孫。常。經。の。間。小。あり。と。ぞ。救。病。寺。と。靈。狐。廟。と。いま。尚。榮。へ。ぬ。

新編 皇極經世一書 卷之五

九十四

ど。多くれ星霜^{せいそう}が経^たりた^まひて。寺^{てら}號^{ごう}を革^{くわ}正^{せい}しと^と同^{どう}えし。

新編 皇極經世一書 卷之五終

